



地御前の町屋が軒を並べる通りに、明治 20 年 (1887) 代に、勝谷酒造を、勝谷孫七・孫一親子で酒造りを操業する。

大正 7 年 (1918) に孫七の子、勝谷 柳吉 氏が八幡製鉄に勤務していたのが縁で、福岡県八幡市へ支店を出す。昭和 20 年 (1945) に、太平洋戦争の空襲に遭い爆弾で、店舗・母屋を焼き閉店する。

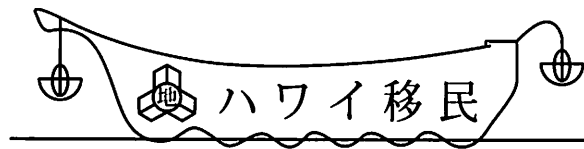
昭和 28 年 (1953) 10 月に勝谷 廉 氏が株式会社組織にする。

勝谷酒造の銘柄と由来

- 勝 の 井 勝谷酒造の「勝」と酒造場に在った名水の井戸の「井」から名前を付ける。
 - 宮島正宗 対岸の宮島から名前を付ける。(みや正宗)
 - 活 力 柳吉氏がドイツへ国費留学したときのドイツのビールの銘柄から名づける
- 昭和 63 年 (1988) 10 月酒の酒造を止める。



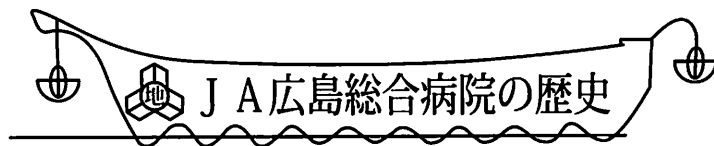
勝谷酒場



広島県で最初の移民は、明治 18 年 2 月で、ハワイへの官約移民 28 人が渡航したことに始まる、とされている。官約移民とは、日本とハワイ王国との間に、明治 17 年に締結された「日布渡航条約」および「日本人移民ハワイ渡航約定書」に基づいて、明治 18 年 2 月から 27 年 6 月までの期間に 26 回にわたって、日本政府の取り扱いによって、労働を目的にハワイに渡航した契約移民をいうものである。明治 27 年に政府取り扱いの移民業務が民間業者に委託されることになり、その後の移民を、「私的移民」というようになった。広島県では地御前村・平良村・宮内村・原村・廿日市町で構成され、地御前村は、移民圏内のうちでも多く、その内訳は、男性 222 人・女性 75 人で、広島県内で最も多いのは、仁保村 2 番目が地御前村であった。1 カ月の給金は 15 円で、病気をせずに勤勉に働けば 3 年間で 400 円の貯金が可能だ、と記されている。当時、内地(日本)では農業奉公人の給金が食事付きで年 10 円程度であった。

なお、明治 24 年末に広島県が行っていた調査では、ハワイ在住の広島県移民者の 75% が送金しており、その額は 27 万円にも達していた。これは同年の県予算の 54% に相当する額であった。送金は主に広島市内の住友銀行や三井銀行など大銀行の支店に振り込まれていたが、これに着眼して村上銀行設立となる。

以前の木造 地御前小学校は、ハワイ移民者の寄付によって建設されたものであり、生存最後の方が 15 年程度前に亡くなられ、一つの時代の区切りとなった。



J A 広島総合病院の歴史

昭和 21 年 6 月佐伯郡内の町村長および町村農業会長の代表の方々が県農業会を訪れ、廿日市方面の緊急対策として原子爆弾による負傷者に対する医療施設の設置をするよう強い働きかけがあった。そのため佐伯郡 37 カ町村および農業会が出資して地御前村元旭兵器（株）の工員宿舎を買収し農業会病院の誘致を決定する。

昭和 22 年 12 月 23 日、四診療科、スタッフ総員 20 名、60 床の病床を有する農業会佐伯病院として開設された。その後、昭和 37 年と 40 年に相次いで増床と診療体制の充実を図り、昭和 41 年には総合病院の認可を受け、名称も佐伯総合病院と改称された。

爾来、同地域は広島市のベッドタウンとして開発が進み、診療圏人口の増加に伴って施設の狭隘化を来したため、昭和 54 年には大幅な増改築が行われ、これを機会に名称も現在の広島県厚生農業協同組合連合会 広島総合病院と改められた。その後更なる人口増加に伴う医療需要の増大により地域の中核的病院の性格を持つに至り、昭和 55 年には二次救急病院の指定を受け、また昭和 59 年および平成元年には増築増床工事が実施され 430 床となる。

更に平成 9 年 5 月には、施設の狭隘化と老朽化に対する対策として新棟建設と既存棟の改築工事が開始され、平成 10 年 10 月末に新棟完成、平成 12 年 2 月には全工事が完了し、同年 4 月より 578 床となる。その後透析用ベッドへの転用により平成 15 年に 570 床、外来化学療法用ベッドに転用により平成 20 年に 561 床となる。

広島西二次保健医療圏の三次救急患者への速やかな高度医療の提供と、広島都市圏域全体の救急医療体制の充実強化のため、平成 22 年 8 月から平成 23 年 2 月にかけて救急棟新築工事が行われ、平成 23 年 4 月には地域救命救急センター 19 床を開設し現在に至っている。

（平成 26 年 4 月 1 日現在）

- 名称 広島県厚生農業協同組合連合会 広島総合病院
- 許可病床数 561床
- 診療科目 計40診療科目
- 指定等
 - ・地域医療支援病院 平成16年8月12日
 - ・地域がん診療連携拠点病院 平成18年8月24日
 - ・DPC 対象病院 平成21年4月 1日
 - ・地域救命救急センター 平成23年4月 1日
 - ・へき地医療拠点病院 平成23年9月 6日



総合病院の前進



戦前昭和 18 年 (1943) 頃、地御前に結核病院が建設される噂が流れ、地御前住民から反対の声が上がった。地御前村は漁師が多く、衛生面から汚物の流失問題で漁業者の反対が強かった。衛生面の約束と地御前住民の療養診療が出来、入院病棟…床を確保できる約束で、地御前村役場と協定確約書が結ばれた。よって、昭和 28 年 (1953) 6 月地御前通信病院が開設される。主として肺結核診療で、診療科目は、内科・外科医療を設置、病床数 60 床。

地御前村から宮内村へ通じる、字 野坂見譲寺に建設される。開設 1 年前、野坂道拡幅工事の時、野坂遺跡が発掘される。病院建設前に病院の敷地の山を開拓した際、貝塚 (アサリ) を主体にした物も発掘される。病院の周りには、殆ど住宅もなく田園の広がる閑静な地で、夏には、小さな小川 (小調子川) に蜚が乱舞する場所であった。

昭和 31 年 (1956) 4 月に第 2 病棟と診療棟が増設される。病床数は 164 床。また、10 月に病床数 184 床に増床される。

昭和 35 年 4 月通信病院の下手 砂畠の地にグラウンド (4,901 m²) を設置。グラウンドは地域の住民も借用でき、野球やソフトボールなどが出来る広さで多くの人が活用されていた。

* 昭和 37 年病床数 164 床に減らし、そのうち、一般病床 28 床・結核病床 136 床。

* 昭和 40 年病床数 123 床。一般病床 43 床・結核病床 80 床。

* 昭和 54 年 4 月成人病多項目健診を開始。

* 昭和 60 年地御前通信病院が廃止される。

32 年間の通信病院開業で、地元 地御前から多くの方々が従事、職務に携わってこられた。広島市内に勤務が変わり大半の方が勤めを辞められた。

昭和 60 年 (1985) 4 月三大公社、日本国有鉄道 (国鉄)・日本専売公社・日本電信電話公社が民営化になり、名称も国鉄は <J R>・専売公社は <J T>・

日本電信電話公社は〈N T T〉に変わる。

地御前逡信病院の跡地は、平成 2 年 4 月野坂中学校が開校される。また、野坂中学校の裏、野坂公園予定地では、長寿会の方々のゲートボールの練習場や、散歩・ランニングコースになった。郷土文化保存会も、サッカー場が出来るまで、とんど祭りの場所として使用していた。



逡信病院



昭和 14 年 (1939)7 月 12 日、「鉄道幹線調査会」が勅令をもって設立され、昭和 15 年 9 月に鉄道省が「東京・下関間新幹線建設基準」を制定し、同年に帝国議会で「広軌幹線鉄道計画」が承認され、国家が昭和 29 年 (1954) までに開通させることを目標に、用地買収工事が開始されることになる。丸子山の左側から右側に至って、中央部の木が伐採されていて、あの辺りを弾丸列車が通るらしい、噂では弾丸列車が通る近くの家は窓ガラスが割れるらしいと話していた。その後、ネットで検索すると、戦後元の土地所有者から「国鉄に売却した土地が使用される見込みがないのなら返還すべし」という内容の訴訟が起こされた。これは、最高裁までゆき、国鉄の敗訴がほぼ確実となった。東海道区間については、東海道新幹線の建設が訴訟中に決定したため返還しないことになったが、山陽区間については、山陽新幹線の計画が具体化されていなかったため、山陽新幹線の建設が決定した際は、返還した土地を再び買収するわけにはいかないのです、多くのルートが変更されることになったという。現、新幹線でトンネルが多くなった要因には、このような背景があったとされる。

若宮 悟 氏 談



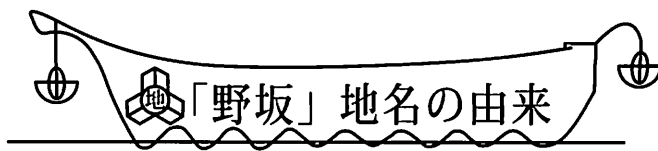
廿日市の海岸線は、それぞれの時代の人々の努力により河川流域での新開開発によって次第に沖へと延びていき、その姿を変えていった。

江戸時代の前・中期、地域では佐方川・可愛川・御手洗川流域を中心に、およそ 30 カ所にのぼる新開が築調されている。しかしそのほとんどが 1 町歩以下の小規模なものであった。それはこの時期の新開の築調が、主として河川が河口に形成する堆積土、三角州を利用して行われたものであってみれば、大きな河川が流れていない市域で小規模な新開が中心になるのはむしろ当然のことであった。開発の目的は当時商品作物として発展しつつあった綿作の耕地として、新開が築調されていった。

扇新開は、文化 12 年 (1815) に地御前村で立案され、翌 13 年 8 月から工事が始まり 9 月 8 日に潮止め工事が完了した。この造成には、地御前村民や雇い夫など 619 人の他に五日市・大野など 16 カ村から 284 人の加勢夫が参加した。名称はその形状が扇形であることから名づけられた。

住吉新開は、弘化 3 年 (1846) から嘉永新開は嘉永 2 年 (1849) から、桜尾新開は文久 2 年 (1862) とも明治 2 年 (1869) とも言われ、それぞれ工事が始まった。

戦後、新開地 (扇新開) に塩田場を作って塩採取に取り組んだが、間もなく廃止となり、空き地広場は青年会や子供たちの草野球場になった。野球練習中、かの有名なアメリカ大リーグニューヨーク・ヤンキースの野球選手ジョーデマジオと、映画俳優マリリンモンローが、新婚旅行で日本を訪問中 (1954)、岩国の米軍基地を慰問で訪れる際、地御前の塩田跡地 (草野球場) に面した道路 (2 号線) を通りかかったところ、地御前の青年や子供たちが野球に興じているのを見て、デマジオとモンローが車から降り、草野球場の輪に入った? という話がある。



「野坂」地名の由来

戦国時代の天文 10 年、鎌倉時代以来の伝統を誇った巖島藤原神主家が滅ぼされた後、実質的に社家の支配的地位を確立したのは、棚守職にあった野坂房頭ふさあきでした。この家系は鎌倉時代末の嘉元 2 年 (1304) の長兵衛尉光久ちようひょうえのじようみつひさにまで遡ることが出来ますが、これによると「長」と称しています。房頭は「野坂」を称し、以降、野坂が続きますが、長から野坂への苗字の改変は房頭より前にも二度あり、野坂家は棚守職を世襲する嫡流ちやくりゆうの長家しよりゆうに対して庶流の間柄であり、嫡流長家の事情から庶流に棚守職が移ったものと推定されています。

いずれにしても巖島神社は古来祭祀には異姓の他人を交えず、佐伯氏の族長があたる規範があるにもかかわらず、承久しやうきゆうの乱後、藤原親実に神主職が与えられ、以後、世襲は行われてこなかったわけですから房頭が神社支配の実権を握ったことは承久以前の古制にかえったとも言えることです。即ち、この棚守家は「長」といい「野坂」と称しますが、元来、佐伯氏なのです。この神社関係者たちは在島以前は地方に住んでおり、社人の修理検校けんぎやうであった佐伯親重の家屋敷が下平良河井(可愛)にあったという元亨 4 年 (1324) の記録があり、房頭の「野坂」の姓も応永おうえい 13 年 (1406) まで住んでいた地御前の小字野坂によると言われます。

広報はつかいち NO555 昭和 62 年 6 月 15 日発行 参照



「阿品」地名の由来

阿品の本谷の奥の辺りに、「岩神」さんがいます。昭和 26 年の台風で社殿が倒れ、今はその附近の山に移されていますが、この神社の祭神については「田心姫命」（芸藩通誌）、又は「足那稚^{あしなち}」（広島県史）としているが、田心姫命は巖島神社に付会したものであり、「足那稚^{あしなち}」が古く正当である。昔「高天ヶ原」から出雲に来られ「ヤマタノオロチ」を退治された「スサノオノミコト」の伝説はよく聞きますが、その時の姫（クシナダヒメ）の父親にあたる方で、土着の神とされていますが、その名前から「アジナ」になったというもの。

「アジナ」は葦でなでるという意味で、葦の生えていた所というもの。

昔弘法大師が、諸国を廻られた時、ここに来られ水を飲まれたところ、「味のない水だのう」と言われたので「アジナ」となったという。

以上、三つの説が、土地の人々に語り継がれています。

岩鏡神社

古くは、岩神社 又 磐神社と称し、阿品の祖神として阿品川の上流の岩山に磐境を拝する地に拝殿があり祀られていました。阿品の氏神さんである祭神は、一説によれば「足名椎」(アシナツチ) ^{あしなつち} 足那槌尊で農業で福をもたらす神で、土地の人に岩神さんと呼ばれている。一説によれば、足名椎は、八岐大蛇退治で知られた寄稲田姫 (クシナダヒメ) の父親で農業の神様です。

昭和 26 年 (1951) の台風により、本殿・幣殿・拝殿と境内の一部も流失し河川改修用地となったが、昭和 28 年氏子により現在の地 (阿品 2 丁目 18-8) を無償提供していただき、本殿社流造り、棧瓦葺と付属社殿・幣殿・拝殿が復興移設建設される。

現在の、岩鏡神社に祭られている祭神は、^{てなづちのみこと} 手摩乳命・^{あしなづちのみこと} 足摩乳命の二柱が祀られている。

下の神社は、昭和 57 年増改築以前の岩鏡神社



岩鏡社



阿品の谷尻から山越えをして、大野村更地をへて西国街道に合流する場所に在った「教え地蔵」は、旅人の安全を見守っておられたお地蔵さん。この谷間奥におられたお地蔵さんは、廿日市ニュータウンの造成工事が始まる昭和 40 年頃までは、阿品調整地の山側付近の山中にあったが昭和 54 年地元の有志の手で現在地に移設された。

西国街道は廿日市・宮内槍だしをへて大野に向かっていたが、旅人や村民は近道として、廿日市から地御前を経て阿品の海岸を抜け谷尻を通り、中山と更地へ分かれて山を越え、西国街道に通じる村道を行き来する人も多かった。

このお地蔵さんは、谷尻の分かれ道に安置され、教え地蔵さんの由来は、山道を辿る旅人が迷わないように、地御前や中山、更地への道を教え旅の安全を守ったと伝えられ、地元の人々からは、今も「教え地蔵さん」と親しみを込めて呼ばれている。



教え地蔵

五輪の塔（供養塔）

弘治元年（1555）毛利元就が厳島の戦いで、陶晴賢率いる 2 万人の大軍とあい交え全滅させた「厳島合戦」があり、毛利の軍勢は対岸の島の陶軍を攻めるために、阿品に兵力を集中させ厳島に上陸を企てました。田尻の「いたみがくぼ」に陣屋を置き、阿品の農民たちに、対岸の島、宮島大元まで届くわら縄を作らせたそうです。この縄を深夜たぐりながら、宮島に上陸を企て、毛利軍と陶軍の戦いが行われた。

その時多くの兵士が討ち死にをし、死体が潮流によって、阿品の海岸に流れ着きました。現在阿品陸橋が掛かっている橋の山は「じんねいの端（鼻）」といわれ、阿品市民センターの裏辺りは海で、明治 10 年頃までは、大洲といわれていた。この山伝いに旅のお坊さんが通りかかり、現在五輪の塔の場所に、藁屋根のお寺を建て、多くの討ち死に兵を葬ったということで、今でもこの山を寺山と呼ばれています。阿品地区には、山裾に当時の墓五輪塔が多く残されていましたが、農民が田畑を作るために殆ど埋めてしまいました。



五輪の塔



お上がり場

明治 18 年 (1885) 7 月 31 日、明治天皇が広島に行幸、宮島に渡航され、厳島神社に御参拝後、大聖院にご宿泊される。翌日、8 月 1 日宮島から阿品の「お上がり場」にご到着上陸されて、廿日市と草津でご休憩され、広島 of 階行社 (浅野藩) にお宿をとられる。

行幸記念として、お上がり場に、浅野長勲侯の書による「西幸記念」の石碑を建立。



お上がり場



明治3年(1870)2月20日地御前村に生誕する。本名 小林花吉。明治28年(1895)若くして、太平洋を渡りハワイ移民たちと同様にハワイに降り立った。当時、28歳でハワイに画塾を開き、ドール大統領・プリンセス カイウラニ・ハワイ銀行頭取の肖像画を描いた時のサインは、Banko「万古」。万古の画号は、25歳から35歳までで日本に帰国して35歳の時、第10回白馬展で油彩を出展した時、画号を「小林千古」に改名。当時の先輩の画匠に万古として使われていたため「千古」にした。

明治24年(1891)カリフォルニア大学に入学 21歳

明治29年(1896)内地展覧会において、クラウン金杯賞受賞 26才

明治30年代に、アメリカで学び、さらにヨーロッパにおいて黒田清輝・岡田三郎助に知己を得て、帰国後白馬会に所属して日本画壇において鮮烈なデビューをする。

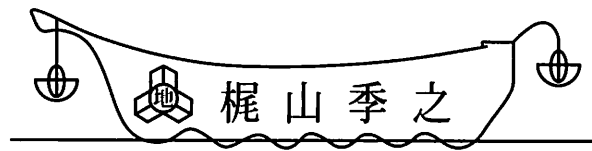


小林千古誕生の地

明治37年(1904)34歳の時、病のためヨーロッパより帰国後、明治44年41歳の若さで病没する。お墓は、金剛寺旧墓地。

小林千古の3大画作は、1.ミルク・メイト 2.パッション 3.誘惑
パッションは、明治34年(1901)31歳の作

小林千古案内板 平成22年2月生誕の地に設置。



土木技師の父が朝鮮総督府に勤務していたため、朝鮮の京城で生まれる。敗戦後引き揚げ、両親の故郷である佐伯郡地御前村で育つ。子供の頃から作家志望で、小学三年頃には冒険小説を書いていた。広島二中を経て広島高等師範学校国語科に入学。在学中に同人誌「天邪鬼」を創刊しジャーナリストのスタートをきる。

昭和 31 年（1956）雑誌新潮に「合わぬ貝」を連載しトップ屋になる。昭和 36 年病気（結核）になり、これを機にトップ屋を辞め本格的に小説の執筆活動にはいる。翌昭和 37 年（1962）「黒の試走車」が大ヒットに、流行作家として多忙を極めながらも、「梶山季之」には若き日からどうしても書き残したいテーマがあった。

生まれ育った「朝鮮」、引き揚げて来た両親の故郷広島「原爆」、母親が移民の子として生まれた「ハワイ」、この 3 つを結び、民族の血と平和を描く壮大な“環太平洋小説”を構想し、20 数年をかけてノート 12,000 冊近い資料を収集していたという。タイトルは「積乱雲」、総枚数 8,000 枚にもなる大作を書き始めた矢先の死であった。

昭和 50 年（1975）5 月 11 日長編小説「積乱雲」取材の為、訪れていた香港のホテルで肝硬変にて 45 歳の若さで死亡。



“移民者の送金受け入れで発展” ふるさと銀行物語より

村上銀行は、佐伯郡内でも屈指の地主である村上隆太郎の全額出資による個人銀行として設立されたものである。当初の状況は次の通りであった。

設立年月日	明治31年4月15日
営業開始日	明治31年6月1日
本店所在地	佐伯郡地御前村8番地2番邸
資本金	3万円
行主	村上隆太郎

佐伯郡内には既に、明治30年6月に佐伯貯蓄銀行と大竹貯蓄銀行が設立されており、郡内での銀行競合は厳しくなることが予想されたが、村上家が敢えて銀行設立に踏み切ったのは、佐伯貯蓄、大竹貯蓄とは一味違った取り扱いを行う銀行を目指したことにある。それは、地元民の金を預貯金してもらうことはもちろんであったが、それ以外に地御前村やその周辺から海外へ移民して行った者が、郷里への送金を村上銀行が受け入れる主銀行となる、という狙いがあった。村上銀行が設立された頃、海外からの送金は主に広島市内の住友銀行や三井銀行などの大銀行の支店に振り込まれていたが、この送金資金を村上銀行が吸収して、郡内で活用できる金融機関であることを願ってのものであった。当時貯蓄銀行では送金などの取り扱いは直接的にはできなかったのである。

広島県は明治以降、ハワイ、アメリカなどへの移住者が多い県として有名であるが実際の数字からみても、昭和35年にホノルル総領事館が調べた「日系一世の出身都道府県別人口」によると、広島県が一位で4715人で24.1%とほぼ4分の1を占めており、次が山口県の3918人、沖縄県の2873人となっている。

村上銀行は、開業当初の明治31年末の貯金は1万5千円余りにすぎなかったが、村上隆太郎一族の信用もあって、34年末には10万8千円余となり、さ

らに 39 年末には 37 万 5 千円に達している。このうち海外送金の割合が如何ほどであったかは判明していないが、ある程度の割合となっていることは想像できよう。一方、貸出金も 31 年末の 5 万 9 千円余りが、39 年末には 39 万円となった。貸出先は主に牡蠣の養殖業者へ向けられている。この 9 年間に資本金は 10 万円に増額しており、店舗も 33 年に五海市村（現佐伯区）に五海市支店を、34 年には平良村（現廿日市市）に可愛出張店を開設して、郡内の取引先の拡大を図った。

明治 40 年 2 月、村上銀行は業務の伸長拡大に伴い、個人銀行での限界を感じるようになり、資本金を 17 万円増資して「合名会社村上銀行」への組織の変更を行った。代表社員には村上隆太郎が就任したほか、社員 5 名はいずれも村上一族で、全員無限責任社員となった。45 年には 5 千円増資して 17 万 5 千円とし、社員も 2 名増している。（村上隆太郎・村上信太郎・村上定一・村上勉吉・村上義一・村上仁二・村上国吉）

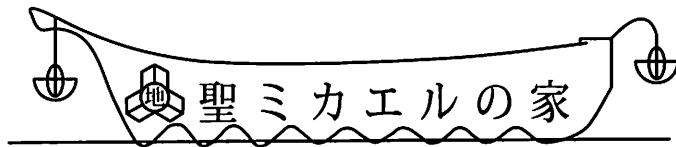
合名会社への組織変更を機に、本店を地御前村から佐伯郡平良村下平良に新築して移転した。地御前村の本店跡は地御前出張店としたほか、新たに佐伯郡大野村にも大野出張店を開設している。そのほか店舗を新設して 9 カ店とし、佐伯郡沿岸部への店舗網を広げたのである。（五日市・能美島・大柿・大竹・巖島等）

合名会社組織となって以降の村上銀行は、外国為替専門の横浜正金銀行（後の東京銀行、現三菱東京 UFJ 銀行）とコルレス契約を結び、より積極的に海外移住者の送金を取り扱うこととした。この成果もあって、同行の業績は順調に進展して大正 2 年 12 月期には、貯金 82 万 9 千円、貸出金 75 万 5 千円、有価証券は 11 万 3 千円となった。

大正 2 年 6 月期までは順調であったが、同年 12 月同じ佐伯郡に本店を置いて営業をしていた銀行が突如預金の取り付けに遭い、その影響は広島市や近郊の銀行に及んで休業する銀行が続出し、広島市とその周辺は空前の金融恐慌となった。同行もその余波を浴びて預金の取り付けに遭遇し、さらに翌 3 年末にも、

山口県の福松銀行が休業したことから、同行と取引のあった村上銀行は流言蜚語が原因で再び取り付けに遭って、資金繰りが極度に悪化することとなった。このようなことから頭取の村上隆太郎は、今後は小銀行では経営が立ち行かなくなると判断し、大正 5 年 8 月、銀行の廃業を決意したのである。

幸いに、日本銀行広島支店長 渡辺文一郎の斡旋で、広島市に本店を置く広島銀行への受け入れが決まり、債権債務と店舗の一切を同行に譲渡して、村上銀行は同年 9 月末を以って解散したのである。なお銀行の営業権は熊本県の毛利昌平・ハツの両名に買い取られ、6 年 1 月に合名会社毛利銀行と改称して熊本県玉名郡高瀬町大字高瀬 45 番地に移転し、資本金 10 万円で営業を行うことになったが、昭和 3 年には安田銀行（後の富士銀行、現みずほ銀行）に吸収されて姿を消している。



福祉ひとすじに生きる

「聖ミカエルの家」 村上百合子

昭和60年2月 村上百合子様寄稿（口述編集）

前半を割愛させていただいております。

昭和27年頃に廿日市の教会が出来て、私は付属の聖マリア園の園長をすることになりました。

その頃岩国基地へ通っておられた神父様がいらっしゃいました。後輩の長井神父様が、あまり日本語がお出来にならないので、村上家で勉強会を開いて下さっていました。

当時教会の二階に、問題のある青年たちをお預かりしておられたのですが、広い家を探していると聞いて村上家を提供することに致しました。

昭和28年7月に長井神父様と、少年刑務所出身の18歳から20歳位の青年達18名が村上家で生活することになりました。

戸口には「聖ミカエルの家」と書いた看板を掲げました。聖ミカエルとは悪魔から私達を守って下さる天使の名前でございます。

その頃、青年たちは応接間で休ませておりました。

しかし床の間の軸や、香炉等を持ち出したり、幻灯機を盗んだりし、そのうちに聖堂の品まで持ち出すようになりました。

生活費なども踏み倒されたり致しましたが、その中で一番情けなく思ったことは、薪小屋に放火された時のことでございます。

幸いにご近所の方々や、消防隊のお蔭で新しい鶏小屋と大蔵の外壁を焼いただけで、大事に至らずにすみましたが、御聖堂や、神父様の書物などもありますので心配でございました。

その後個人の力も限界を感じておりましたし、ご近所の事も考え、裁判所長官であった近藤倫二氏の勧告などもあり、青年達を預かることは止めてしまい

ました。人にはどうすることもできない持ち前というものもある様に思いますが、なかには母の愛で立派に立ち直った子もおります。

私はまだ家のことで手が抜けなくて、充分なお手伝いもできませんでしたが、会計の事と、就職の世話をできるだけやって参りました。

その間に信者であるお婆さん達三人のお世話もしておりました。

昭和 33 年には里親申請が受理されて、児童相談所から送られてくる子どもの、里親として子どもたちを育てることに致しました。

人は神の恵みによって生まれたのです。愛情をもって育てるならば、必ず変わっていくと思いました。

しかしそれぞれに問題をかかえたこども達で、苦勞の連続でございました。

嘘をつく、万引きをする、おねしょをする、給食費や納入金を使うなど、素直でない子にお手伝いの方もお困りでした。

信者の方々でずいぶん沢山の方がお手伝いをして下さいました。津野、南本、佐々木、浦部、江見、長門の皆さんには、とても感謝しております。

自分の過ちを素直に認めるようになり、規則正しく登校してそのうちに学力も向上して、上級学級へ進学する子が出たり致しました。報われた喜びの一つでもございます。

預かった子どもは 16 名になります。その内の 3 名は改心の状態が見えず、とうとう教護院に引き取ってもらいました。

この様な非行少年達の姿を通して考えましたことは、やはり子どもの頃に親元を離れて、あちこちを転々として手に職もなく、下積みの生活で満たされることもなく、その内にやけになって職を失い果ては泥棒をすることになって、少年刑務所へと送られるのだと思います。

国家は罪を犯した少年達に、沢山の経費を払っているのです。国家の損失だと思っております。それならば恵まれない子どもを、小さい内に引き取って愛情をもって育てて、将来独立できるような専門職を、身につけさせてやりたいと思ったのでございます。

子ども達には人の手助けが必要なのではないか、これからは子ども達を育てることを生きがいとしたいと思いました。

子ども達も次々に成長して、その後は里親の委託もなくなりましたので、昭和 44 年からは病院で産まれた引き取り手のない赤ん坊を預かることに致しました。

赤ん坊には先ずミルクを与えることから始まり、なかなか大変でございました。

この時の 6 名の子ども達が、今も一緒に生活している高校生 1 名、中学生 4 名、小学生 1 名なのでございます。

私の息子達は自分の血の近い人に、愛を感じるのが自然ではないかと申します。

でも恵まれた者だけが良くなるということは、間違っていると思うのでございます。恵まれた者だけが集まり、財閥という言葉で特別扱いされることも、好ましい事ではございません。

恵まれない人達が社会的混乱を起こす要因を作ることになるのではないかと思っております。

子ども達の身の周りの物や、衣服等のご近所の婦人部の方が手弁当で御世話して下さいますので、随分と助かっております。

生活費用は措置費の支給や、児童手当、又長井神父様のご助力により、昭和 35 年フランスの児童福祉本部からの寄付を戴けるようお願いして下さい、随分と助かりました。

その外篤志家の寄付等もございましたが、不足分は私財を売ったりしてそれに当てました。食費は国の基準でいきますと、一日 700 円でございます。私は 600 円で工夫をして栄養バランスを考えて、合理的にやって参りました。そのせいでしょうか子ども達に 1 本の虫歯もないということが、私の自慢でございます。

私も自分の被服の新調は一切しない様にしております。子ども達も現在の状

況をよく理解してくれています。

子ども達の名前は親に付けてもらっておりますが、戸籍については一切タッチしない方針で、就職するまでお世話しようと思っております。

現在の私は子ども達の面倒を見ながら、月に一度広島矯正管区教誨師と、篤志面接委員として八本松少年院、木船少女苑、吉島刑務所、吉島鑑別所へ通って長井神父様のお手伝いをしております。

私がこれまでやって来られたのは、すべて先祖の協力があつたればこそ出来たのだと、本当に感謝の気持ちで一杯でございます。

今後出来ますならば、働く人達の老人ホームを造りたいと考えております。その時にはこの家を壊して、村上家の古い鴨居や立派な柱を使って造ることが出来たらいいのにと願っております。

と、村上さんは今迄胸の奥に温めていた大事なものを、そっと漏らしたという感じで、希望にあふれた笑顔で首をちょっと傾げて語られた。

村上百合子様 プロフィール

- 明治 43 年 (1910) 四国の多度津にて佐村益雄氏の長女として出生
- 三才より東京四ツ谷、中野に在住
- 東京女子高等師範卒業
- 昭和 6 年村上勝三氏と結婚
- 昭和 11 年洗礼 洗礼名マリア・モニカ / ベロニカ
- 昭和 61 年 (1986) 勲五等瑞宝章受章



聖ミカエルの家



野球応援歌（宮島さん）

歌詞

宮島さんの神主が

おもくじ抽（ひ）いて申すよう「申すには」

何時も地御前が

勝 ち、 勝 ち、 勝 ち、 勝 ち

勝った方がエーヨ 勝った方がエーヨ

この歌は三段階の紆余屈折を経て明治 44 年の夏以前に地御前村内で成立したもので、昭和 4 年に成立した所謂「地御前村歌」と共に地御前村民の心意気を表明したものである。

明治 44 年、当時広島商業 2 年生だった吉岡省三さんが作ったとされている。しかし明治時代の卒業証書台帳には名前が記されているが、その後の消息はさだかでない。

地御前の野球は明治 30 年頃、ハワイ移民が伝えて始まった。マスクは村の鍛冶屋が大きな針金で作られ、野球場は鉄道施設で上田尻に出来た空き地を利用し、組は旧来の慣行で町と浜の二組に分かれていた。

次は歌詞である。古来の対抗意識をむき出しに、「町（又は浜）勝て、町勝て、勝った方がえ〜（良い）ぞ」と応援した。これが歌句の末尾の部分となった。

次いで、先進野球団の強みで、対外戦に常勝したので「何時も地御前が勝ち、勝ち、勝ち」と云う部分が附加された。又日露戦争の戦勝祈願と杓子で飯（召）取るとの縁起関係で「宮島さんの神主が云々」と云う文句が上に附加されて、この奇抜な応援歌が村内で完成した。

次は奇抜な応援体勢である。これは明治 44 年 (1911) 夏に地御前郷友クラブと廿日市篠尾倶楽部とが廿日市小学校の高須グラウンドで対抗試合を挙げた時に初めて披露された。村内に有る限りの大太鼓を担ぎこみ、10 名のラッパ隊、

村社の祭礼用である天狗の服装で乗込む者、大杓子の持込みなど、その異様さは人目を驚倒さすに充分であった。しかし、肝心の野球は県師の本式の投手を村青年として起用したが、足の負傷で敗けた由。

ところが、この地御前の応援歌並びに応援服装は、同年秋か翌年には、広島で県中と広島商業の恒例の対抗野球戦に、両校の応援団が其儘に持込み、大混乱を生じた。結局、両校へ通学していた地御前出身者同士の話合いで、以後、県商だけが借用することに決定した由である。

広島商業は大正5年(1916)8月の全国中等野球第二回大会で、地御前村の応援歌並びに応援方式(杓子)を天下に披露している。以上の次第で、召取り杓子だけは、今日でも野球戦に名残を留めている。

最近では、カープ応援でも歌われご存知の方も多くなりました。



NHK “あなたの声リポーター” 山口英美恵リポーターのブログ引用。

渡辺通氏 談

地 御 前 村 歌

作 詞 吉本 管太郎

作 曲 吉沢 実



地 球 - の う - え を い え と み て



ば ん り の は と う を も の と せ ず



か い が い と お - く わ た り ゆ き



ゆうひに なあるは わがむら ぞ

地 御 前 村 歌

一
地球ちきゅうの上うへを家いえと見てみ

萬里ばんりの波濤はとうを物ものとせず

海外かいがい遠く渡りわたゆき

雄飛ゆうひに名なあるは我わがが村むらぞ

三
前まへに榮はえある歴史れきしをば

つぎて光ひかりをいや増ますは

後のちに生うまれし我々われわれの

肩かたに懸かかれる任にんむ務むなり

二
御國みくにのためなり家いえのため

体からだを鐵てつと鍛きたひあげ

百折ひやくせつ不撓ふたうの意氣いきを練ねり

額ひたいに汗あせしていそしまん

四
村人むらひと共とも一いっ致ちして

共ともに精こころ神ほたてを火立岩わたていわ

相愛あいあい心こころに燃もえたちて

村むらの榮さかえを圖はからなん

作 詞 吉本 管太郎
作 曲 吉沢 実

地御前ものがたり

平成 27 年 11 月 3 日 初版
平成 28 年 5 月 31 日 2版

編 集 地御前郷土文化保存事業

発 行 者 地御前地区自治会
(地御前市民センター内)
〒738-0042 廿日市市地御前三丁目 10-5
T E L : 0829-36-2360

協 賛 地御前地区自治会 文化事業部
地御前地区自治会 町連事業部

印刷・製本 株式会社 フジワラ
〒738-0014 廿日市市住吉二丁目 14-14
T E L : 0829-32-8778

